

# 2019

## 浙江科技学院プログラム



2019 8.12~8.26

Zhejiang University of Science and Technology  
in China

## ～参加者プロフィール～



田中 謙慎（団長）  
医学部  
医学科 2年

日本語が通じない海外の環境で生活することや異文化に触れることが刺激を得たかったのと、中国という国に興味があったため。



矢野 裕子（副団長）  
教育学部  
幼小連携教育コース  
特別支援教育専攻 2年

春休みにSUSAPを利用して台湾に行った際、中国語が喋れなかつたことが悔しく、中国語を取得すると決意したため。



福野 佑斗  
理工学部  
機能物質化学科 2年

授業で中国から来た留学生と話す機会があり、中国という国の雰囲気を感じてみたいという気持ちが強くなり、中国のこと、中国語を勉強することを決心。また、英語のスピーキング力とリスニング力をあげたいと思っていたため。



上村 尚之  
理工学部理工学科 1年

英語でのコミュニケーション能力の上達と、ICT・IoTの分野で急速に発展する中国を身近に触れ、日本との違いを考え、これから勉強に生かしていきたいと思ったため。



中村 光希  
農学部生物資源科学科 1年

まずは、海外に行きたいと言う気持ちが強かつたため。また、中国は今や世界の中で巨大マーケットとなっているので中国語を学ぶことによって、将来様々な場面で活躍できたらと考えたから。



木村 龍太郎  
理工学部  
理工学科 1年

英語力を上げたいというのと、中国語に触れてみたいという理由で参加を決意。また日本の世間が思う中国人や文化を自分の目で確かめたいため。



古賀 優菜  
農学部  
生物資源科学科 1年

日本語が通じない人々や日本とは違う環境の中で生活してみたかったのと、近年発展が著しい中国を肌で感じてみたかったため。



横山 望瑛  
芸術地域デザイン学部  
芸術地域デザイン学科 1年  
地域デザインコース 1年

第二言語で中国語を受けていたので、本場の中国で中国語を習って話してみたいという単純明快な理由から参加を決意。また、日本から出て自分の目でアジアを見て、肌で実感したいと思ったため。

## プログラム概要

【期間】2019年8月12日～8月26日（15日間）

【留学先】浙江科技学院

浙江省杭州市留和路318号

### 【内容】

このプログラムでは、中国の言語、歴史、文化などを英語を使って学習した。前半は大学がある杭州で、後半は上海で過ごす。佐賀大学生8人の他に、ドイツからの学生18人が参加。

#### ・前半

午前中は主に中国語の授業が英語で行われた。中国語検定1級の取得を目指して初級中国語を学んだ。

午後は杭州市内の観光、水墨画や切り絵等の文化体験をした。いずれも、英語の流暢な中国人バディやドイツからの学生と共に過ごすので英語によるコミュニケーション能力が必須であった。寮に宿泊。寮は留学生専用になっているので、世界各国から来た留学生との交流もできた。

#### ・後半

主に上海都心部での視察をした。上海タワー周辺の観光や食事、交通などの様々な面から中国での生活を体験した。ホテルに宿泊。

また週に1度休日があるため、好きなプランを立てて行動することが出来た。

## 浙江科技学院大学について

浙江科技学院は工科を主とする工学・理学・文学・経済学・管理学・教育学など6つの大きな学科部類を揃えた公立大学である。

経済発展が活発で中国の一級都市の一つである浙江省の杭州市に位置する。また世界遺産である西湖の近くに位置しており、山と川に囲まれ豊かな自然を持つ。広さは約100ヘクタール。

開校後すぐにドイツとの協定を結び、浙江省の対仏教育、科技提携の重要な窓口になっている。毎年、学校から積極的に国際協力を求めて数百名の学生が、ドイツ、オーストラリア、イギリスなどに送られる。学内の国際学生の数も増加している。

## ～授業紹介～

授業は基本的に、9時30分から11時30分まで、途中に休憩を一回挟んだ。授業スタイルは、配布されたテキストを用いて、先生が板書したことをメモする、発音の練習をする、問題を解くというようなものであった。授業の最後は集大成となる小テストを行った。

授業を通した私の感想は、実際に声に出すことはとても大事であるということである。中国語は、発音がとても複雑であり、聞いた音をまねすることが難しかった。そのため、何度も声に出して練習することが重要であった。これは、日本における英語の授業にも通ずるのではないかと感じた。

## ～研修日程～

第1週（8月12日～18日）

第 1	8月 12 日	AM PM	佐賀→中国
--------	---------------	----------	-------

週	8月 13 日	AM	授業
	PM	キャンパスツアー	
8月 14 日	AM	杭州市見学（美術館など）	
	PM		
8月 15 日	AM	授業	
	PM	カンフ一体験	
8月 16 日	AM	授業	
	PM	工芸品作り	
8月 17 日	AM	授業	
	PM	中国式ペーパーカット体験	
8月 18 日	AM	自由時間	
	PM		

13日から、中国語の授業が始まった。基本的に午前中に授業があり、午後に文化体験という形で活動した。14日の杭州市は西湖などの観光名所に行き、様々なものを見学した。一日中歩き回っていたので、みんなへトへトだった。

第2週（8月19日～26日）

第 2 週	8月 19 日	AM	授業
	PM	自由	
8月 20 日	AM	授業	
	PM	Song Dynasty Town 訪問	
8月 21 日	AM	授業	
	PM	中国式書道	
8月 22 日	AM	テスト	
	PM	水墨画	
8月 23 日	AM	上海観光	
	PM		
8月 24 日	AM	上海観光	
	PM		
8月 25 日	AM	上海観光	
	PM		
8月 26 日	AM	中国→佐賀	
	PM		

22日にテストがあり、中国語学習のまとめを行った。私は、リスニングがとても難しいなと感じた。23日から25日にかけては、上海を思い存分満喫した。

## ～文化体験～

文化体験としては、カンフ一体験、工芸品作り、中国式ペーパーカット、中国式書道、水墨画があった。日本の文化と似ている部分もあり、日本と中国の関係の強さを感じた。書道では、ドイツ人留学生に筆の持ち方を教えるというような文化的交流もあり、とても良い経験となつた。



カンフーの様子



工芸品作り



水墨画



## ～フリーの過ごし方～

大学内や大学周辺の街を散策したり、その大学に通っている色々な国の人々との交流をしたりした。

一例を下で述べたいと思う。

- ・大学周辺の街で散策していたら、おいしくて、また、かわいい子供に出会うことのできる中華料理店や、日本人の方がシェフとウェイターをされている「加藤」という日本料理店に出会うことができた。
- ・一緒に中国語を勉強しているドイツの学校からきている人達と、夜にドイツのトランプゲームである「シーケレット・ヒトラー」という人狼に似たゲームや、「ドゥラーハ」というゲームを教えてもらいらしながらしたり、日本の「パパ活」や「大富豪」を教えて、やってみたりして、ドイツの学校からきている人たちとの交流をした。
- ・浙江科技学院内には、展望台があり、そこにいたパパアニューギニアの人と話したり、学院内のコンビニで働く中國の人たちと日本の映画の話をしたりした。

上で述べたとおり、今回の留学は、多くの国の出身者との交流をすることができ、フリーな時間は、プログラムの内容と同じくらい濃い時間であった。

## ～交通～

バスに関しては、浙江科技大学の近くには、バス停があり、バスの本数もかなり多いため、移動しようとするときに、あまり困ることはなかった。バスの時間を調べるのが難しかったため、自分たちは、日本で出会った中国出身の人に調べてもらったため、かなりスムーズに行きたいところに行けた。しかし、それが難しそうであれば、チューターに聞いてもよいと思う。

電車、地下鉄に関しては、浙江科技学院の近くにはないが、少しバスで移動すると行ける。今回自分たちは、利用しなかった。話によると、杭州から上海まで地下鉄で行く際は、切符を買うのに、30分かかるらしいので早

めに動いた方がよいだろう。上海の場合は、切符を買うのに時間はかかるず、日本の電車とほとんど変わらない場所案内となっていたため、分かりやすかった。警備がしっかりとしており、駅に入る際は、荷物検査が行われるので、虫よけスプレーやハサミなどの刃物を持ち運ぶ際は、注意が必要である。

空港に関しては、特に日本と変わることろはない。しかし、日本から中国の空港に着いた際、自分たちの荷物の周りをずっとうろついていた人がいた。荷物の管理は、必ず自分や友達の目の届くところに置くことを心掛けた方がよいと思う。



杭州と上海を紹介してくれた友達

## ～食事～

プログラムの一環としていく食事は、すべて中華料理であった。ウェルカムパーティーでは、北京ダックが出る高級感のある食事だった。ウェルカムパーティー以外の食事も少し高級感のあるレストランが多くあった。プログラムに含まれない食事に関しては、浙江科技学院周辺の街に歩いていき、そこで中華料理であったり、日本料理であったり、イタリアンだったりを食べていた。

中国の料理の特徴について下で述べたいと思う。

- ・食べ物の値段が安い。例えば、チャーハンは、一皿 10 元（日本円で約 150 円）。
- ・かなり量が多い。
- ・油物が多い。
- ・辛い料理は、ほんとうに辛い。
- ・食べ物が、屋台のように外に出されたまま売ってある店が多かった。
- ・お皿とコップがラッピングされて、持ってくる時があった。



## ～まとめ～

今回の浙江科技学院プログラムは、私たち 8 人にとって、驚きや発見の連続であり、とても充実した 2 週間を過ごせた。中国の言語に関しては、発音、イントネーションがとても大事であるため、その言葉を実際に使っている人から教わることで、しっかりととした発音、イントネーションを身に着けることができたと思う。また、中国の言語を使っている国にいるため、アウトプットの機会にも恵まれ、意欲をもって中国の言語を学ぶことができた。中国の文化に関しては、課外活動を通して、また、中国に住んでいる人との交流を通して、深く学ぶことができた。また、ドイツの学校から来た人たちや浙江科技学院に通っている人たちと濃い時間を過ごすことができ、多くの国の人たちと、異文化交流の良い機会に恵まれた。この留学は、中国という国や文化について深く知ることができたのは、もちろんだが、それ以上に自分たちの価値観を変えさせてくれたものであった。今回学んだことを、今後の学校生活や仕事で生かしたいと強く思う。

このような機会を与えてくれたこのプログラムに、とても感謝している。



## 「中国での出会い」

### 医学部医学科 2年 田中謙慎

私は浙江科技学院プログラムに参加した。8月12日から22日までは杭州で、23日から26日までは上海で過ごした。私にとってこれが初めての留学であり、物凄く刺激的な二週間であった。今回多くの国々の留学生と関わる機会があり、彼らは中国をはじめとし、ドイツ、ブルガリア、ルワンダ、パプアニューギニアなどの人々である。共通言語は英語であり、日本人以外の留学生全員が、英語が堪能であった。そのためコミュニケーションの中で日々苦労することがあった。

今回の留学での一番の財産は、人との出会いであると感じている。特にドイツの大学生との交流である。彼らは私たちの2倍の人数参加していた。不真面目な人、真面目な人、内気な人、積極的な人など様々な人がいた。考えてみれば当然の事であるが、今までは

「ドイツ人は○○」という風に国で一括りにして考えていたために当たり前のことを見逃していた。また感性や価値観などは全く異なるものであった。留学開始当初、私たちは彼らと積極的に関わることを避けていた。それは慣れない環境に疲れていたことや英語で会話することの難しさのために逃げていたのだと思う。せっかく遊びに誘われても断ってばかりだった。今振り返ると大変勿体ないと思う。しかしある時、彼らと共に夕ご飯を郊外に食べに行った。そこで初めて沢山会話をしたように思う。この日は忘れられない大切な日になった。

あるドイツ人の友人との会話で言われた言葉が胸にささった。「ドイツでは友情を大切にする。知り合いと友達は全く別である。共に多くの時間を過ごし、会話をしてお互いをよく知ることでしか友達にはなれない。日本人はそうではないのか?今までどうして誘いを断られていたのか正直よくわからなかった。もしかしたら、僕たちの振る舞いが君たちをイラつかせたりしていたのかと考えていた。」と言われた時、彼らが日本人ではないことを痛感した。私たちは勿論友達になりたいと思っていたが、曖昧な態度をとっていた。日本では言葉にしなくとも相手の気持ちを汲み取るような文化があるため、それでも問題ないことがある。私は大変申し訳ない気持ちになるとともに、日本人と付き合うときと同じではいけないと強く感じた。

私はもっと関わりたいとずっと思っていたため、その日から言動を変えた。遊びに自ら誘うようにもなり、誘われた時ははつきりと答えるようにした。遊びの中ではお互いの国のカードゲームを紹介したり、街を散策したりした。会話の最中にうまく英語で伝えることが出来なくともどかしい瞬間が何回もあり、カードゲームのルールを説明する際などは特に大変であった。それでもその度に必死に私たちの英語を理解してくれようと丁寧に聞いてくれた。そしてある時、私の下手な英語に付き合ってくれてありがとうと伝えた際、「自分自身を侮辱することはやめてくれ。君の英語は上達しているし、君は上手くなろうと頑張っているから十分だ。だからそんなことは言わないでくれ。」と怒られた。日本では自分を下げることで相手をたてる文化があるせいか、自分を下げることに抵抗がない人が多いと思う。この感覚が通じるもの日本人だけであると感じた。しかし私は怒られたとき全く

悪い気はしなかった。彼らは自分の事を一番に大事にして、はつきり自分の意見を周りに伝える。日本人は周りを伺いながら素直に自分の意見を言えない人が自分を含め多いと思う。それが悪いかどうかは別問題として、彼らと関わる中で私は前者の方がいいなと感じた。ドイツの大学生は、全員がドイツ人ではなく様々な国の人があった。そのため一人一人、外見も考え方も宗教も異なるが、それぞれが互いを尊重しあう姿は素敵だった。日本ではあまり見ることが出来ない光景であった。

次に中国について感じたことを述べる。まずは浙江省の杭州市についてである。私たちは大学の周りの小さな町で、食事や必需品の調達などをしていた。そこはいかにも下町といった感じであった。食事も基本的に20元前後で手頃に食べることが出来た。大学と異なるのは、英語が全く通じないことである。中国語でのみ会話が可能で、私たちは翻訳アプリを駆使して注文を行った。一方で、中国の方も翻訳アプリなどを使い、日本語に訳してくれる親切な方も沢山いた。しかし、やはり中国で生活する上では、中国語を習得することは必須であると感じた。また、買い物の支払いはあらゆる場所で携帯決済が主流であった。驚いたことに、ゲームセンターのクレーンゲームでさえも携帯決済であった。私たちは現金で支払いをしていたため、何かと不便な事が多かった。しかし、外国人である私たちがアリペイを使うことは出来ないため、その点は外国人でも使うことが出来るような仕組みを作って頂きたい。因みに、予想以上にクレジットカードが使えない場所が多く、渡航する際に現金は必要である。また、街のあちらこちらで建設中の建物が沢山あった。更にそれらは大変大きな建物で、中国の発展を物語っているようであった。

次に上海について述べる。上海はすさまじく発展した大都会であった。沢山のビルや町中に地下鉄やバスなどが張り巡らされていて、交通の便もよかつた。上海には、外国式の建物が多く残っていた。西洋式のものが一番多かったが、中には朝鮮式のものもあった。今でも過去の歴史を忘れないために残されているものであろうが、暗い感じはなく前向きな印象を受けた。

今回2週間中国で過ごしただけでも、中国が今まさに発展途上であり、場所によっては日本をはるかに上回るほど発展していることを感じるところもあった。人の数は大変多く、その市場の大きさは途轍もないと思われる。こうした点で、中国語を勉強する価値は十分にあると思う。一番の成果は、中国で沢山の人と出会い、関わることであると確信している。この出会いで気づいた自分自身の課題に対して帰国して取り組まなければならない。



大学付近の下町

## 「中国での経験を振り返って」

### 教育学部 幼小連携教育コース 特別支援教育専攻 2年 矢野 裕子

～はじめに～

私は浙江科技学院プログラムに参加して、日本では経験できないであろうことに多々直面した。その中でも印象的な経験を2つのテーマに分け、自分の考えとともに述べていく。

#### ① キャッシュレス社会の中国

中国を訪れ、自分の意見が変わったことのひとつにキャッシュレスについて挙げられる。中国を訪れるまでは、スマホ決済に対して「無駄遣いをしてしまいそう」「安全面が保障されていないかもしれないから不安」といった根拠のない否定的な意見ばかり持っていた。しかし、中国を訪問した後の今では、日本でももっとスマホ決済が普及されるべきだと考えるようになった。このように考えるようになったのは、様々なことを経験したからだ。まず、私たちが大学の近くのレストランや杭州の街中で現金で支払いをしようとした際に、おつりを貰えないかもしれないという事態が何度も発生したことがある。スマホ決済が普及しているため、レジに現金が置かれていないことが象徴される場面であった。また、私たちのような海外からの訪問客が集団で現金で支払いをしていて、ふとその後ろを振り返ってみると、いつの間にか長蛇の列ができていることがよくあった。そのときスマホ決済による支払いは一瞬で支払いが完了するので、回転効率も上がるということに気がついた。さらに、中国の友人たちはスマホひとつあればどこにでも行けると言っていることがとても印象的だった。中国では、地下鉄やバスなどの交通機関でもスマホで支払いをすることができる。そのため、普段財布を持ち歩くことは滅多にないとも言っていた。これまでの私はスマホと財布と交通系ICカードの3点セットを持ち歩くことは当たり前で、なにも違和感をもっていなかったが、中国に来て「なんて不便なんだ！」「なんて無駄なことなんだ！」と感じるようになった。中国を訪問したことによって、キャッシュレスが進むことのメリットをたくさん知ることができた。関連して日本に帰国して間もない頃、大変興味深いニュースをテレビで見た。中国の紙幣が新しいデザインに変わるというニュースだ。このニュースをきいて、私は正直紙幣に需要がないのでは？と最初は思った。なぜならキャッシュレス化が進んでいるので現金を使う機会が減っているからだ。しかし、このことについて中国に住む友人にどう考えているか意見を尋ねてみると考え方を改まった。中国では偽札が流通していたり、田舎ではまだ現金払いが主流であったりするそうだ。キャッシュレス化が進んでも紙幣の必要性がまだあるということだ。もし、中国を訪れていなかったら、このようなことについて考えることはなかっただろう。日本でもキャッシュレスがより普及するように、まずは私もスマホ決済アプリを入れてみるとした。キャッシュレス化が進み、日本でもより便利な生活ができるなどを願う。

#### ② 食を通じて異文化交流

本プログラムは、ドイツの学生とともに参加していた。私自身ヨーロッパ出身の人と関わることはこれまであまり経験がなかったので、新発見がたくさんあった。まずは、日本との違いである。日本人が当たり前

のように使っているお箸をドイツ人は普段は全く使わない。中国や韓国などのアジア圏ではお箸を使って食事をすることが主流だが、ヨーロッパではフォーク、ナイフ、スプーンを使うことが主流だ。ドイツの学生たちは、中国にきて食事をとることに困らないよう、中国を訪れる前に、エジソン箸をつかって練習をしたと言っていた。箸をつかうことはとても難しいと感じているようだった。そのため日本人の私たちが箸の使い方を教えたりもした。日本人はどのように箸の使い方を習うのか？と聞かれたときに、フォークやナイフ、スプーンの使い方を習うのと同じように、お箸も幼い頃に親などから習うと言ったら驚いていた。箸ひとつのことととってもこんなにも考え方、感じ方が違うのかと異文化を感じる瞬間だった。一方で日本と似ているところも発見した。大学の近くに偶然日本食のレストランを見つけたので、ドイツの学生とともにそのレストランで一緒にディナーをとった。そのレストランのメニューにはトンカツがあった。これをみたドイツの学生たちはドイツにも同じような食べ物がある！と言った。それはシュニッツェルという食べ物で、写真を見せてもらうと本当に日本のトンカツとそっくりだった。日本とドイツは距離がとても離れている国同士だから、食文化において違う点がたくさんあるのは予想できたが、似ている点もあるというのはびっくりだった。トンカツからどんどん話が派生していく、お互いの国の食文化について話し合えたのはとてもいい経験になったと思う。ここから、食を通して国際交流をするのは面白いなと思った。私は将来小学校の教師になろうとしているので、子供たちが異文化を理解する際には、食を例にしてみたいと思う。

～まとめ～

私はこのプログラムに参加したことによって、これまでとは違う視点で物事を見つめることの楽しさを知ることができた。また、中国はもちろんのこと、ドイツについても知り、ディスカッションをすることができたのはとても貴重な経験となった。自分の人生観が変わるべききっかけになったし、もっと長期間の留学に参加して、異文化を体験したいという新しい目標を持つことにもなった。2週間という短い時間だったが、私たちが有意義な時間を過ごせるようにサポートをしてくださった浙江科技学院のスタッフの方々や2度目のSUSAPの参加を許してくれた両親、またこのプログラムを提供してくださる佐賀大学や佐賀大学で出会った中国出身の留学生のみなさんへの感謝の気持ちを忘れることなく、ここでの学びをこれからの大學生や人生に活かしていきたい。



決済アプリで支払いができるようQRコードがおかれて  
いる上海市内のフリーマーケットの写真

# 「これからを生きていくために必要なもの」

## 理工学部機能物質化学科 2年 福野佑斗

私は、浙江科技学院プログラム（中国）に参加して、中国語の勉強や、カンフーをしたりお茶の博物館に行ったりなどの課外活動、ドイツから来た人たちとの交流を通して私が学んだことがあります。それらは、今後の人生において大事なことだと考えています。

一つ目は、固定概念の恐ろしさと無意味さです。私は、留学に行く前は、「中国」は日本よりインフラが進んでいなくて、自然環境も住むことが大変なぐらい汚れていると思っていました。また、「中国人」は、日本よりも親切に接してくれないだろうと思っていました。しかし、実際に中国の上海と杭州を訪れてみると、そのようなことはほとんど感じませんでした。まずは、インフラについてです。水道の水は飲むことはできませんが、上下水道は、しっかりしています。電気や交通手段についても、日本とほとんど変わりませんでした。ここまで聞くと、日本と同じ水準かと思うかもしれませんのが、中国は、日本以上です。買い物や食事などの支払いは、「アリペイ」というアプリでのスマホ決済が主流となっています。そのため、財布を持っていく必要がありません。ITの発展は、凄まじいものです。ここで、お金について注意してほしいことがあります。それは、杭州は、クレジットカードがあまり使えなかつたということと、現金は、100元札よりも細かい50元札や1元硬貨を準備しておくと良いということです。なぜなら、アリペイのおかげで、お釣りをもらうという機会が減り、レジにあまり現金が入っていなかつたためです。次に、「中国人」についてです。確かに、中国の空港にいたときに、明らかに自分たちの荷物を取ろうとしている人に会い、怖いと感じることもありました。しかし、英語が分からぬにもかかわらず、身振り手振りを使ったり、Google翻訳を使ってくれたりして、分かろうと、また、伝えようしてくれる人や、笑顔で挨拶をしてくれる人もいました。結果から言ってしまえば、住んでいる国でその人の行動や性格を理解することはできません。大事なのは、出会い、コミュニケーションをとり、そこで感じたことがすべてであるということです。

二つ目は、言語の大事さです。今回の留学は、授業や課外活動、ドイツから来た人との会話は、すべて英語で行われました。中国語の授業に関しては、優しい英語で行われたため、不自由なく勉強することができました。しかし、課外活動やドイツから来た人たちとの会話の時は、簡単にはいきませんでした。スピーキング力とリスニング力の無さや知らない単語の多さを改めて感じる場面でした。それ以上に私が感じたのは、日本のことに対する興味を持っていて、日本のことについて質問してくれているのに、自分が言いたいように伝えることができないというもどかしさでした。コミュニケーションをとるために、身振り手振りを使うことは、大事です。しかし、それ以上に大事なのは、言語だと私は感じました。これは、一つ目に述べたことにもつながることだと思います。

三つ目は、伝えようとする大事さです。これは、ドイツから来た人との会話をしているときです。会話の中で「はい、か、いいえ」をはっきりしろと言われる場面が多くありました。はっきりと返事ができない

いのは、話の相手の機嫌を損ねないかを真っ先に考えてしまう私がいるからですが、聞いている人からすれば、どうしたいかを聞きたいのは当然です。また、自分の英語が伝わらないと感じた時に、話をシャットダウンしてしまう私がいました。それは、話をしている人のことを知ることを拒否していると同時に、自分自身がどういう人なのかを伝える機会を失ってしまっていることを表しています。それでは、いつまでたっても分かりあうことはできません。英語ができないのは努力が足りなかつたからですが、話をしているときに後悔しても遅いのです。それなら、分からなくても逃げずに、分かるまで話すべきなのです。そんなことを強く感じる場面でした。

四つ目は、人との関わり方についてです。これも、ドイツから来た人との会話をしているときです。英語が伝わらないことを恐れた私は、できるだけその人たちに伝わらないようにした時がありました。それは、とても楽でした。しかし、その時に、ドイツから来た人に言われた言葉が、いまだに残っています。「なぜ、人と接することにエネルギーを使わないのか?」。この言葉を聞いた時に、逃げていた自分を恥じました。それと同時に、このような言葉は、小学校の道徳で習ったはずであったのに、いつから忘れたのだろうと思いました。思い返せば、学部でも、部活でも、最近の自分は、自分中心に考え、人に傷つけられないように、人との関わりを避けていたように感じます。こんな自分では、ダメだと強く思ったと同時に、その言葉を聞いた時から、人としっかりと向き合おうと決心しました。

この浙江科技学院プログラム（中国）で学んだことは、中国の文化や言語はもちろんですが、それ以上に、一人の人としてどうあるべきであるかということでした。人は一人では、生きていけないとよく言われますが、まったくその通りだと思います。それは、現地に住む人の優しさやドイツから来た人とのコミュニケーションを通して感じました。私は、人との関わりを大事にして、お互いのことを固定観念ではなく、話している間にできたイメージを持てるような人になりたいと強く思います。そのためには、まずは、人と積極的にかかわるよう意識し、言葉の壁に困らぬように、言語の勉強をする必要があると思います。また、私自身が、日本のことについて知らないことがたくさんあることが、会話の中で分かったので、日本のことでもっと知るために、旅行をしたり、歴史を学んだりして、日本のことでも広く、深く知れるようにしたいと思います。このように、自身の課題や将来について考える機会を与えてくれたこのプログラムに対し、とても感謝しています。



ドイツからの学生とゲームをした後

## 「一人の日本人としての責任」

### 理工学部理工学科 1年 上村尚之

今回のプログラムでは、多岐にわたり様々なことを学習することができた。その中で、中国のICT・IoT、外国人との交流について考察する。これら2つの事柄を通して私は、「一人の日本人としての責任を持つ」ことの重要性を再認識するに至った。

まず、中国のICT・IOTについて考察する。今回、中国に留学を応募した理由の一つに中国のICT・IoTは、日本とどう異なるのかを肌で感じられることがあった。日本と大きく異なる点は2つあった。1つ目は、買い物時の支払い方法である。中国では、Alipayでの支払いが主流になっている。現地の人たちはバスの運賃、食事、スーパーマーケットでの買い物すべてAlipayでの支払いだった。小学生くらいの子でもAlipayを使いこなしていたことに驚いた。日本でもPayPayなど携帯で支払うことはできるが、まだ一部のお店しか対応していない。中国ではそれがすべての店で利用できるという点で、日本より進んでいると思った。また、私たち日本人が現金を使って支払いをすると支払い時間がとてもかかり、私たちの後ろに長蛇の列ができていた。支払いがスムーズにできるという点においても日本もこのシステムを取り入れるべきだと思った。2つ目は、共有自転車、バイクの設置についてである。大学の敷地の中にはもちろん、道路のいたるところに設置されてあった。中国人のバディに聞くと、大学内の移動はこの共有自転車で行われているようだった。この支払いももちろん、Alipayで行われている。私は、この制度を佐賀大学にも取り入れることができれば、駐輪場の問題や、休み時間の自転車による混雑を改善できるのではないかと思った。

次に外国人との交流について考察する。今回の留学を応募した一番の理由は、英語のコミュニケーション能力を上達させたいと思ったからである。最初の週は、ドイツ人の流暢かつ速い英語に圧倒され、自分が言いたいことが言えず、話すことに消極的になってしまった。ドイツ人に自分に話しかけても話せないと思われていないかとても不安になった。しかし、ある一人のドイツ人が

「ドイツ語は英語に似ているからドイツ人は英語を喋るのが上手だと思う。日本人は漢字が分かるから中国語は分かるだろう。ドイツ人にとって中国語はさっぱりわかんないよ。」と言ってくれ、ドイツ人の優しさを肌で感じ、たどたどしい英語でも積極的に話していこうと思った。そして、隣の浙江大学に留学に来ているルワンダ人と展望台で会い、自分の英語力向上のため、二日後に会って話す約束をした。ルワンダ人と話していく中で、私は今回の留学で一番考えさせられ、今後の課題を見つけることができた。ルワンダ人は私にこう言った。「アメリカ人とアフリカ人は日本人にとって何が違うのか。また、黒人についてどう思っているか。」私は、うまく答えることができ

ず悔しかった。自分がいかに日頃物事を考えていないか痛感させられた。また、「日本と中国の文化の違いは何か」と聞かれ、それについても答えることができなかった。私は、日本を出て、初めて自分が日本についてあまり知らないことが分かった。しかし、彼らは自国について詳しく教えてくれた。私は、留学に行くまでルワンダという国について、またルワンダ人とはどのような人達なのかも全く知らなかった。そして自分は、彼らに話を聞いたことで、ルワンダという国についてや、ルワンダ人とはどのような人達なのかについて、彼らの話から想像し、印象づいた。同様に彼らも日本について私の話から想像し、日本はどのような国なのか印象づけることが出来たと思う。日本を一步出ると一人の日本人としての責任を感じた。私は、この留学でこれらのこと気に付くことができたのも大きな成長だと感じている。

私が今回、このプログラムに応募したきっかけは、英語のコミュニケーション能力を上達させたいと思ったからだったが、予想していた以上の多くのことを学ぶことができた。特に、私がこの15日間のなかで考えさせられたことは、冒頭でも述べたように日本を一歩でると「一人の日本人として責任を持つ」ということである。私は、今回の留学でルワンダという国を初めて知り、ルワンダ人と初めて話した。そのルワンダ人の話す内容から、ルワンダという国はどのような国なのか、ルワンダ人はどのような人達なのかを想像した。逆に彼らも、日本という国について同じように考えていたと思う。また、今回多くの人と会話をすることができたが、自分の英語の未熟さを痛感した。しかしそんな私にも親切に対応してくれた方々に心から感謝したい。

私は、今回の留学でもっと様々な国の人と考えを聞きたいと思い、長期留学することを決めた。これからは、長期留学に向けて、英語をもっと勉強し、日本人として恥をかかないよう、日本についてもさらに勉強していきたい。



ルワンダ人との記念写真

## 「留学を通して学べる事」

### 理工学部理工学科 1年 木村龍太郎

私は浙江科技学院プログラムを通して、人や文化、モノにまでにも、様々な影響を与えられました。それによって、自分に心と行動の変化をもたらされた事に気付きました。

具体的に言うと、まず一つ目に、このプログラムに参加することによって、中国語を学びたいという意欲を得ました。プログラム内に組み込まれた中国語の授業が分かりやすく、難易度も優しかったため、楽しいと思えたという理由もありましたが、中国の文化と中国にいきたいという思いがきっかけをつくってくれました。というのは、中国の文化について気づいたことを言うと、基本的に中国人には簡単な英語でも全く通用しないということです。これは、日本と違って、中国にはカタカナ語がないからだと予想しました。街をみても、都会に行かなければ英語表記もなかったため、たとえ中国人全員が、学生時代に英語を勉強していたとしても、大人になって使わなければ一切英語に触れる事はないのだと感じました。日本人の方が、英語を生活の中で聞き慣れている人が比較的に多いのではないかと思います。今回のプログラムで、また中国に行き、技術について知りたいと思っているのですが、このような文化のため、中国語を学ばなければ、知りたいことも知れないと危機感のようなものを感じることができました。

二つ目は、日本で中国の技術を真似すべきではないかと思わされた事です。特に印象的だったのは、キャッシュレス化の浸透度です。事前研修で、中国が財布の盗難や脱税問題の対策として電子マネーが普及したと学んではいましたが、飲み物の自動販売機や、散髪と言ったサービス業でさえも、ほぼ全ての売買が電子マネーで済んでしまうのだと実際の目で確かめることで、キャッシュレス化を感じることが出来ました。また、お店で商品を買うために列になっている人の様子を見て、ある疑問が浮かびました。それは、「何故中国は人口が多いのに日本と列の混み具合が変わらないのだろう」ということです。それはやはり、圧倒的にキャッシュレス化のおかげであり、お会計中に財布からお金を探して出している人が1人もおらずスムーズに会計を済ませていたためでした。私も実際に長い列に並んで商品を買いましたが、自分が思っていたより、自分の番が来るのが早いのを感じました。ここまで述べたのはキャッシュレス化のメリットで、デメリットとして携帯の充電が無くなれば何も出来ないのでないかと思いました。すると、そこに対する対策もなされていました。それは、モバイルバッテリーの自動貸し出し機の導入です。私は日本では東京でしかそれを見たことがありませんでした。自分の留学先の浙江科技学院の周りは、都心に比べると田舎の方でした。しかし、田舎であろうと、お店であれば中に、モバイルバッテリーの自動貸し出し機があったのです。使い方は簡単で、貸し出し機に記載されているQRコードを読み取るとバッテリーがでてきて、使用した時間分料金が銀行から引き落とされるそうです。日本でも、やっとキャッシュレス化が進んできています。スリや脱税といった犯罪が少ない日本には需要がないのかもしれないと思う所もありますが、このように、キャッシュレス化は、自分の考える限りでは大き

なデメリットがないように思うので、真似していくべきだと感じました。

三つ目は、もっと、英語を話しに行く姿勢を見直すべきだと感じたことです。そう思ったきっかけはドイツ人留学生たちです。私たちとドイツ人留学生たちが教室で出会った次の日から早速、ドイツ人留学生たちが、「学校の周りを散策してみないか?」と提案してきました。私たち日本人グループの何人かは一緒に行ったのですが、自分は英語が話せる自信がなくてその誘いを断ってしまいました。しかし、その日の次の日に、一緒にご飯を食べに行こうと誘われました。勇気を出してついて行くと、質問に対して“OK “や” Thank you “といった簡単な返しかけ出来ず悔しかつたので、「簡単な返しかけ出来なくて申し訳ない」とドイツ人たちに伝えると、「こうやって話すことが1番の近道」「出来ないことを口に出してはいけない」と自分の弱気な姿勢を正してくれました。ドイツ人留学生はこの食事の後もたくさん誘ってくれたので、会話の返しが出来なくてもいいから、その誘いに全て乗って、とにかく話してみることにしました。そこで話すうちに、ドイツ人の話し方を真似して、「” do you mean~? “を使えば相手の言うことを確かめられるぞ。” ~because~” を会話に取り入れると話が弾むな」と、だんだんと返しのコツがわかってきて、会話するのが楽しくなりました。このように、会話のコツが掴めたのも、出来なくてもとにかくやってみるという見切り発車のような考えを持っていたドイツ人のおかげだと感じました。このドイツ人の考え方を英語だけでなく、ほかの生活にも活用していければ良いと感じました。

終わりに、留学を通して出会った現地の方のやしさには本当に助けられましたし、中国語学習の励みになりました。ドイツ人留学生との意見交換をする場も多くあり、文化の違いに悩まされました。様々な方と交流する中で、市販のお茶になぜ砂糖が入っているのか、ドイツ人はなぜ自分の意見を強く主張出来るのかなど、私の「ありえない」ことが、「あたりまえ」になることを感じ、今までの自分がいかにちっぽけだったかに気づかされました。



モバイルバッテリー自動貸出機

## 「密度の高い二週間」

### 農学部生物資源学科 1年 古賀優菜

留学を終えた時一番に思ったことは、大学一年生でこのような貴重な経験が出来て良かったということである。私はこの二週間、毎日新しい気づきを得、ただ日本で過ごしていたら出来なかつたであろうかけがえない経験をすることが出来た。

私たちは主に中国の2つの都市で過ごした。大学が位置する杭州、そして上海である。杭州は、中心部は都会だが、大学周辺は比較的閑静な土地だった。食事のためによく訪れた近くの飲食街は、日本と比べると暗い雰囲気で治安が悪く、店員の接客や商品の陳列がぞんざいである印象を受けた。同時に日本のおもてなし精神や店の清潔感の高さを感じた。しかし、仮にそれが日本での「非常識」でも現地では「常識」であり、国や文化によって認識の違いがあるということを学んだ。留学終盤に行った上海は、都市化がとても進んでおり、東京の何倍もの人・建物・空気感に圧倒された。中国の発展が著しいということは知っていたが、現地で改めて中国一の都市のスケールの大きさを、さまざまと見ることが出来た。

このプログラムには、私たちの他にドイツからの学生も参加した。彼らと最初に出会った時は、緊張と疲労で空港発のバスの中では会話を交わすことは無かつた。しかしその日、日本人何人かで勇気を出してドイツ人の輪の中に入つてみると、皆明るく良い人達であった。彼らはとても英語が流暢で、初めのうちは話すのも聞くのもまるで修行をしているかのようであつた。しかしそれも日を追うごとに慣れていき、彼らと話すことがだんだん楽しくなつていった。彼らの英語の話し方をよく聞いて、自分の中に取り入れることで実用的なコミュニケーションの仕方を学ぶこともできた。また、日本に興味を持っている学生とは日本の言語・文化・音楽を紹介したり、逆にヨーロッパの国のことを探つたりと、違う国で暮らす人々との会話全てが刺激的であった。特に印象的だったことの一つに、ドイツ人の一人が言った「時間を共にして相手のことを知ることにエネルギーを使わないと“友達”にはならない」という言葉がある。私はこれを聞いて、2週間という短い時間の中、休んでいる暇は無い、せっかく出会った仲間とは“友達”になりたいと感じた。それからの日々は、授業や夕食だけでなく、それまでは誘われるだけであったカードゲームを自分達からも誘つたりして過ごした。最終日、彼らとの別れは寂しいものであったが、“Have a good flight, my friends”と言われた時はとても嬉しかった。

共に過ごす中で見つけた彼らと私たちの違いがある。まず、彼らはとても行動力があり、行きたい場所ややりたいことなど、興味を持ったことにはすぐに挑戦していた。同じ期間を過ごすにしても、どれだけ行動したかによって充実度は変わってくる。私たちも見習うべき姿勢だと感じた。また、彼らは日本人に比べ、ものをはつきり言う習性がある。私たちにとっては日常的な、相手を気遣うあまり言葉を濁す習性は、外国人にとっては煩わしいのだそうだ。これらの違いは、異国で暮らす人々の間では生じて当たり前である。また個人でも差はあるのだろうと思うが、今後外国人を関わっていく上で円滑なコミュニケーションをするための参考にしようと思った。

他にも大学内にはたくさんの留学生が寮に住んでおり、多様な国から来た留学生と交流することができた。通訳をお願いしたくて話しかけた中国人の学生、コンビニで出会ったルワンダ人とその友人達、展望台で出会ったパプアニューギニア人…。出会いのきっかけは様々である。母国は違つても、英語があればコミュニケーションをとることが出来た。関わる前は、全くの他人であった彼らとは、時に時間を忘れて色々なことについて語り合う仲間となり、私たちが日本に帰る頃には別れを惜しみ合う間柄になれた。ここで私が強く考えたことは、たまたまの出会いから次のアクションを起こさない場合には、それ以上の関係は築けないということである。先入観や浅い思考に留まらず、積極的にコミュニケーションを取ることが重要なのだと気づいた。同じプログラムを共にした佐賀大学の仲間も含め、2週間という期間の間で偶然出会った人々は、私の留学をより充実したものにしてくれたし、忘れられない友人になった。彼らとはこれからも連絡をとりながら良い友達でいたいと思う。

私はこの留学のキーワードは、主に語学力・コミュニケーション力・積極性の3つであると考える。語学力に関しては、2週間で付ける語学力に限界があるということは言うまでもない。しかし、私はこのプログラムを通して外国語を使ったコミュニケーション力は確実に上がつたと言える。現地では、私たち以外日本語を話すことが出来る人はいない。だからこそ迷つたり分からなかつたりしたら、他人に声を掛けで頼るしかない。その中で、私は何度も人々の優しさに触れた。英語が通じなくても(特にお年寄り)、「我是日本人(私は日本人です)」と伝え授業で習った中国語を駆使してみると、相手は身振りや図を使ってなるべくわかりやすく伝えようしてくれた。言葉の壁は確かに感じたが、互いが相手の言わんとする理解しようという気持ち、積極的なコミュニケーション力こそがそれを壊すのであると身をもって確信した。

最後に、私はこの留学で中国という国が好きになつた。建物・文化・洗練された都會を更に見るため、そして留学中にできた友人に会うために、また訪れたいと思う。

この留学で得た多くのことを、日本やまた次に行く国でも忘れずに過ごしていきたい。



カンフーの先生と

「中国を選んだ意味」  
 芸術地域デザイン学部芸術地域デザイン学科  
 地域デザインコース 1年 横山望瑛

私はSUSAP浙江科技学院プログラムに参加して、2週間で多くのことを学び、習得することが出来ました。

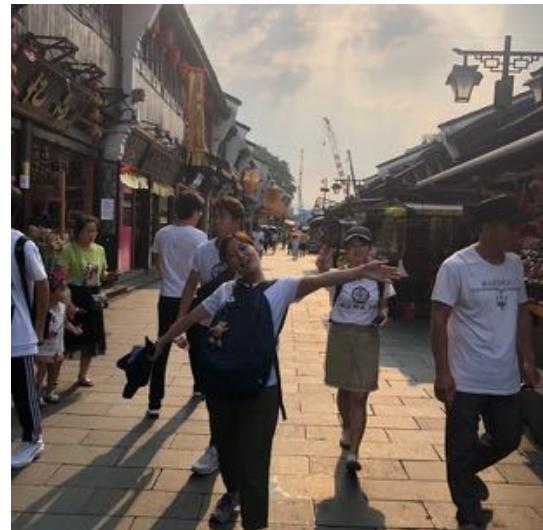
まず1つ目は、コミュニケーション能力が高い=英語をスラスラ話すことができ、理解することが早いと言うわけではないと言うことです。私は第二言語で中国語を受けていましたが、4ヶ月でスラスラと話し理解出来るようになっていました。また、英語が得意でもなく、向こうでどうやって生活していくかと留学初日から思っていました。「苦手」という言葉が頭から離れず、自分から先生や一緒に留学していたドイツ人に話しかけに行くことが出来ませんでした。他の仲間たちは自分から話しかけに行っていました。しかし、私はついて行くことが出来ず後ろの方にいました。すると、ドイツ人である一人の男性の方から私に話しかけに来てくれました。その時に私はチャンスをもらえたと思って、頑張って話してみましたが、彼は気付くのが早く英語が苦手なのがばれてしまいました。私はもうドイツ人が私に話しかけに来なくなるなと思ったのですが、その後も話しかけに来てくれました。更に私のためにゆっくり英語を話してくれました。それを機に、私からも話してみようと思うようになりました。少しずつでしたが話しかけに行くようになりました。中国語の先生にもわからないところを質問しに行くことができるようになりました。ただし、大学を出ると英語を話せない人が多かったです。ご飯を食べに行ったり、買い物に行ったりするとお店の方は見た目からだと50歳以上の方やお年寄りの方が多く、日本と同じく英語は若者しか話すことが出来ないのだとわかりました。中国は旅行者が多い国だから、みんな英語が話せると思い込むことはいけないとわかりました。この件は日本も共通することだと思います。

次の2つ目は笑顔等の言葉以外でのコミュニケーションの取り方も大切なことであるということです。コミュニケーションを取る方法は、言葉だけではないということを知りました。二日目の夜にWelcome Dinnerがあり、大学の教授とご飯に行きました。そこで美味しい料理を食べたのですが（食べることに集中するのは良いことだと思いますが）ずっと下を向いて食べることになります。ずっと下を向いたままだと表情はわかりません。そんな時こそ前を向いて美味しかったという表情をして食べることも、相手とコミュニケーションを取ることに気づきました。表情だけでなく視線もコミュニケーションに入ると思います。ドイツ人と一緒にご飯に行くときは必ず中華料理の豪華なお店に行きました。毎回中華でだんだん帰る頃に近づくにつれて飽きてきたりしていたのですが、とても美味しかったので笑顔で食べることが出来ました。顔の表情は言語よりも伝わりやすいことがわかりました。日本の留学仲間たちだけでご飯に行くときもニコニコしておくと中国人の方から話しかけてくれ、楽しく食事することができました。

3つ目は自分自身の外国へのイメージや思い込みで過ごすことは良くないということです。私の中国へのイメージはあまり良い国ではなく、人々も親切ではないと思っており、そのイメージを持ったまま中国へ行

きました。しかし、そんなことはなく親切で優しい人々ばかりでした。私は寮で同じ部屋だった優菜と、一番してはならない事件を起こしてしまいました。部屋のルームカードを部屋に置いたまま外に出てしまつたのです。私が扉を閉めてしまいまい、とても焦りました。夕方でしたので先生も大学に居らず、先生に電話で解決策を聞くことしか出来ませんでした。まず先生に電話すると、管理人と清掃員がコンビニの先を曲がったところにある小さな小屋の中にいるので、開けてもらえると言われたので行ったのですが、最初は行ってもどれが小屋かわかりませんでした。とりあえず近くを回っていたら管理人、清掃員らしき男性と女性が小屋にいたので行ったのですが、2人とも英語が話せず追い出されました。もしスマホがあれば翻訳機で対応できたはずですが、私のWi-Fiも優菜のスマホも部屋の中でしたので無理でした。そこでコンビニのアルバイトの人に英語で「管理人はどこにいますか」と聞けば教えてもらえるかしれないと思い、聞いてみると、連れて行ってもらいました。管理人の小屋は、私たちが行ってところで合っていましたが、中国人がいるのに開けてくれませんでした。もう無理だと思っていましたが、店員さんがお店に戻らず最後まで私たちのところにいてくれて最初の管理人に電話で詳しく説明してくれました。私たちが悪いのに管理人から店員さんが色々と言われており申し訳なかったです。店員さんは、仕事中なのに私達のために最後まで一緒にいて助けてくれました。中国人は他人に全く興味ないイメージを持っていたので、イメージで人々を判断することはよくないということを知りました。本当に店員さんには感謝しかありません。この後、彼女と私たちは仲良くなり連絡先を交換して、ずっと連絡を取って話していました。日本に帰ってきてからも続いています。

私はSUSAP浙江科技学院プログラムに参加して自分自身を成長させることができました。気になることは謎のままにしておくのではなく行動して行うこと、思い込みはよくないということを知りました。また日本では経験できない、中国の伝統を学ぶことが出来ました。芸術的なことが多く、芸術を学ぶ私にはプレッシャーでしたが、2週間楽しく過ごすことが出来たのでよかったです。この経験を忘れないようにしていきたいです。



杭州のショッピングストリート

## 「プログラムを通して感じたこと」

農学部生物資源科学科 1年 中村光希

私は、ただ単に中国に行ってみたいという安易な考え方で、このプログラムに参加することを決めた。研修が始まる前までは目標も立てず、ただ海外に行くという事実に満足してしまっていた。しかし、研修を重ねていくうちに、自分がどれだけ無駄なことをしようとしていたかを知った。目標を立て、それを達成するために、現地で試行錯誤することこそが、留学の意味なのではないかと思う。

約二週間の中国での生活を通して、自分の価値観が変わったり、いろんな出来事があったりと、とても濃い二週間だったと思う。まず、国によって当たり前の概念は違うのだと感じた。よく考えれば普通のことなのだが、実際に体験してみると、とても衝撃的であった。例えば、トイレにトイレットペーパーがない、現金ではなくスマートフォンで支払いを済ませるなどである。このような日本での当たり前と中国での当たり前の違いを直接経験することによって、日本がいかに恵まれているかを改めて実感することができた。そして、中国以外の国の当たり前を知ってみたいと強く感じた。

今回学んだ中国語は、とても基本的なものである。現地の人とコミュニケーションができるほどのものとは言えないが、ある程度の規則などはだんだんと分かってきたので、これからも引き続き中国語を勉強していくと思う。しかし、そこには大きな問題がある。それは発音である。中国語の発音はとても細かく、覚えることが難しい。そのうえ、正しい発音を学ばないと変な癖がついてしまうらしい。だから、学ぶときは独学を行ったりせず、一つ一つ正しい音を聴いていき、丁寧な学習を心掛けていこうと思う。

この二週間で最も心に残っていることは、ドイツ人留学生とのコミュニケーションである。なぜ心に残っているかというと、様々なことを考えさせられたからである。まず感じたことは、いざ話すとなると、なかなか言葉が出てこないということである。最初のうちは緊張もあったせいか、なかなか自分の思っていることが言えず、ただ質問に答えているだけだった。そして、次に感じたことは、どんなことに対しても深く考えるようになろうということである。ドイツ人留学生の中に、ニコラスという人物がいた。彼は、どの分野においても様々な知識を持っていて、いろんなことを教えてくれた。ニコラスに何か教えたいと思ったが、普段どんなことに対してもあまり深く考える習慣がない私にとって、それはとても難しいことであった。とても悔しかった。

この留学での経験をこれからの大學生に生かしていきたい。



ドイツ人学生と散策した時